

2011年カツオ

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数				量									
	漁獲	産生	地冷	輸入	輸出	輸出	東京	消費支出	消費支出	在庫	加工品			
					生冷	缶	生	生(万円)	鰹節(g)		缶	削	節	生利
22	304	67.8	211.9	59.6	62.3	0.1	13.9	1,126	303	26.5	12.6	19.1	64.2	2.74
23	247	45.3	182.2	42.2	46.8	0.2	10.7	993	294	22.5				
%	81	67	86	71	75	323	77	88	97	84.9	0	0	0	0

年	価		格		輸出	消費支出	消費支出
	産	地	東京	輸			
	生	冷	生	入	生冷	生(円)	鰹節
22	275	136	492	103	117	1,629	945
23	334	155	543	131	118	1,445	924
%	121	114	110	127	101	89	98

漁業・資源・漁獲

日本のカツオ漁業は、千葉以南の沿岸や伊豆諸島周辺で行われている曳縄を別にするると大別し一本釣りともき網に分けることができる。また、カツオの漁獲量の大半がこの2つ

の漁種により占められている。

中西部太平洋のカツオに関する漁業の特徴は、まき網漁業が中心で8割以上、竿釣り漁業が約1割、その他の漁業が1割弱を漁獲する。まき網漁業については日本・韓国・台湾・米国の遠洋漁業国が5～6割を占め、他はインドネシア、パプアニューギニア、フィリピンが多い。竿釣りについては、日本が5～7割を占める。日本周辺の中心的漁場の常磐・三陸沖漁場（漁獲量10万トン前後）でも1980年代後半からまき網操業が増加し、年により漁獲量の半分近くを占める。2011年の犬吠沖～三陸沖漁場を主体とする本邦近海における生鮮の水揚量は竿釣り2.8万トン、まき網0.9万トンで前年（竿釣り3.8万トン、まき網2万トン）を下回り、過去5カ年の平均値（竿釣り3.3万トン、まき網2.6万トン）を竿釣り、巻き網とも下回った。

戦後、日本の竿釣り漁業等の漁場拡大により総漁獲量は徐々に増大し、1960年代後半には20万トン、1970年代後半には40万トンに達した。その後、さらに熱帯水域のまき網漁業の規模拡大で急増し、1990年代には100万トン前後が漁獲され、1998年からは120万トン前後で推移し、2009年には過去最高の178万トン（暫定値）に達した。北緯35度以北の日本近海における竿釣りともき網による総漁獲量は1970年代以降、平均約6万トンで推移してきたが、2009年（39,796トン）は過去10年（1999年から2008年までの平均値：74,107トン）で最低漁獲量を示し、1975年以降では1981年（36,801トン）、1990年（38,232トン）に次ぎ3番目の低漁獲量であった。

この海域における資源状況は、漁獲による死亡の割合は増加傾向にあるが、自然死亡に比べて低い値に留まっている。新規に資源に加わる加入量は大規模な海洋変動現象（エルニーニョやラニーニャ）の影響が大きいと言われている。現在の漁獲圧はMSYレベルより下で、過剰漁獲にはなっておらず、資源量もMSYレベルより上で、乱獲状態にはなっていない、と考えられている。

本資源は1980年代中期から高い水準が続いているが、現在資源水準は高位でその動向は減少傾向にある、といわれている。

インド洋では最近5年間の平均漁獲量（2005-2009年：49万トン）のうち、38%がEU（ス

ペイン・フランス)とセーシェルを中心としたまき網漁業、32%が流し網漁業(主にインドネシア、イラン、スリランカ)、23%がモルディブなどの竿釣り漁業、7%がその他の漁業という内訳になっている。2006年までは全漁業の漁獲量が増加する傾向にあったが、そのうち特にまき網漁業の漁獲増大の比率が高く、FADsの利用拡大によるところが大きかった。最近では、まき網による漁獲のうち80%がFADsでの操業によるものである。また、西インド洋(FA051海域)と東インド洋(FA057海域)における最近5年間における平均漁獲量の割合は、75%:25%となっている。

インド洋における日本のカツオ漁獲は、その殆どがまき網漁業によるものである。1957年以来、民間のまき網船1-2隻が1980年代半ばまで操業していた。1988年以降、まき網船数が増加し最大時には10隻となり、1992-1993年の漁獲は3万トンを超えた。また、1977年からの海洋水産資源開発センター(現在:水産総合研究センター開発調査センター)の日本丸が試験操業を開始し、現在までほぼ毎年調査を実施している。1994年以降民間のまき網船数は徐々に減少し、最近5年間では日本丸の試験操業および1-2隻のまき網船(民間船)が操業を行っているだけで、漁獲量は2,000-4,400トンで推移している。

インド洋での総漁獲量は、1950年から年々微増し1983年には7万トンを超えた。西インド洋でまき網漁業が本格化した1984年に総漁獲量は10万トン台、1988年に20万トン台、1993年に30万トン台、1999年に40万トン台、2005年に50万トン台、2006年に60万トン台をそれぞれ超え急増した。2007-2009年は、ソマリア沖海賊問題によりソマリア沖の広い海域でEUのまき網漁船が操業を自粛したため、それぞれ46万トン、43万トンへと急減した。

資源評価は今まで実施されておらず、資源状況ははっきりわかっていない。しかし、2010年の第12回熱帯まぐろ作業部会で、資源に関する種々のデータを分析した結果以下のことが分かり、資源状況は以前に比べて悪くなっていると見られている。(a)漁獲量は2006年にピークを記録したがその後急減している。(b)まき網CPUE(探索日あたり)は素群れ操業の場合変動が小さいが(2.5トン)、付き物操業の場合には2002年のピーク(19トン)から2006年まで変動しながら減少してゆき、2007-2008年には急減したが、2009年に高レベル(18トン)に戻った。(c)平均体重は、付き物操業の場合1990年代は、2.1-3.0kgの範囲で(平均2.6kg)で大きく変動したが、2007-2008年は2kgに減少した。2009年には2.4kgに増加したが、1990年代の平均より低い。(d)また、素群れ操業で漁獲されたカツオの平均体重は、2007年までは3-4kg内(平均3.2kg)で変動したが、その後急減し2009年には2.4kgとなっている。インド洋の資源は、以前に比べると悪くなっているが現在資源水準は高位でその動向は横ばい傾向にあるといわれている、といわれている。

また、国内供給問題では、近年大型竿釣り船の休・廃業(30年前の1/10程度)が多くなっており、燃油問題や資源問題も含めて、今後の経営不安要素も多い。また本年は、東日本大震災で家族の安否確認のため、海巻船等の寄港も多く、4月の水揚げが急減した。

本年のカツオの漁獲量は、24.7万トンであった。

産地水揚量と価格

23年の産地水揚量は、22.8万トンで前年（28.1万トン）を下回った。

内訳は、生4.5万トン、冷18.2万トン（前年：生6.8万トン、冷21.2万トン）であった。

本年の生鮮（日本近海）の漁況は、釣りの初漁期（1～4月：犬吠埼以南の本邦南岸域漁場）は比較的良かった昨年をやや上回った。5月以降は漁況が上向きに推移したが、漁場は福島原発の放射能漏れの影響もあって常磐近海には形成されず、黒潮前線を越えてからもかなり沖合操業を余儀なくされ、近年では最も悪かった一昨年を上回ったものの、前年を下回った。

一方まき網漁は、あまり山場のない漁況で、水揚げは近年では最低となった。

また三陸の多くの冷凍冷蔵庫の被害の中で、処理能力の限界もあり、漁船の誘致にも従来とは違う展開がみられた。なお風評被害の中、本年は静岡以西での水揚げの増加が顕著であった。

海域別漁獲量は、三陸36%（前年：68%）、犬吠～常磐39%（前年：17%）、南西・東海3%（前年：1%）、九州西部4%（前年：7%）九州南部19%（前年：7%）であった。ただ、本年は上述のように、漁場というよりも、震災の影響による水揚げする産地市場の選択に大きな変化がみられた。

本年も漁場形成の主体は三陸・犬吠埼沖合海域主体で、初漁期の薩南や小笠原～豆南海域での漁も比較的好調であった。

南方竿釣りのカツオ(東沖を含む)焼津						海外まき網の状況(焼津)					
年次	単位		22年	23年	前年比(%)	年次	単位		22年	23年	前年比(%)
水揚隻数	隻	延	166	171	103	水揚隻数	隻	延	204	217	106
水揚量	トン	計	42,609	45,034	106	水揚量	トン		144,412	121,822	84
々	々	カツオ	29,567	32,488	110	1隻当たり	々		708	561	79
々	々	キハダ他	13,042	12,546	96	水揚金額	100		22,335	21,215	95
1隻当たり	々	計	257	263	103	1隻当たり	万円		109	98	89
水揚金額	100	計	9,604	8,887	93	価格	円/kg		155	174	112
1隻当たり	万円	計	58	52	90	水揚量	トン		107,442	95,360	89
価格	円/kg	平均	225	225	100	1隻当たり	々	カツオ	527	439	83
々	々	カツオ	196	189	96	価格	円/kg		124	143	115
々	々	キハダ他	292	220	75	水揚量	トン		34,676	23,304	67
						1隻当たり	々	キハダ	170	107	63
						価格	円/kg		252	306	121
						水揚量	トン	メバチ	2,151	2,844	132
						々	々	その他	143	315	221

冷凍カツオは、竿釣り（焼津）は南方が前年（1.8万トン）をやや上回る2万トン、東沖が前年（1.1万トン）をやや上回る1.2万トンで南方、東沖とも前年をやや上回った。一方、本年の海巻きは、カツオが前年をやや下回り、キハダ（キメジ）が前年をかなり下回り、メバチ（ダルマ）は前年をかなり上回った。

消費地入荷量と価格

23年の東京消費地の入荷量は、生1.1万トンで前年（生1.4万トン）をかなり下回った。

近年カツオの入荷のピークは東京では6月型になっている。本年はかつてのように5月に

ピークがみられたが、8月に入荷が急減したこともあって年間の入荷量は前年をかなり下回る低水準であった。

近年カツオはB1製品の定着の中で市場外流通主体に「タタキ」や東沖「トロカツオ」等は周年商材として出回っている。本年は漁況が盛り上がり欠けたこともあって出回りはやや多かったものとみられる。

本年は漁の低迷もあり、出回りが多くなる時期に自粛ムード等もあって、末端での消費も数量、金額とも昨年を下回った。

価格は、613円で入荷量の減少を反映し、前年の492円を上回った。

在 庫 量

なお在庫量は、2.3万トンで国内生産、輸入とも少なかったことを反映し、前年（2.7万トン）を下回った。

輸 出 入

カツオの輸出は、原魚と缶詰に分かれるが、缶詰輸出は既に国際競争力はなく、年々少なくなっている。

本年は、原魚4.2万トン（前年：6.2万トン）、缶詰194トン（前年：60トン）であったが、原魚輸出は缶詰用として貴重になっているが、本年は国内漁の低迷や近海巻き網等の不振や冷凍・冷蔵庫の被災の影響もあって、前年をかなり下回った。

輸入は平成年度に入ってから円高傾向が本年は更に進んだこともあって増加してきた。これは節用需要の高まりで量、価格、品質とも安定している輸入物への依存度が高まっているためである。本年は為替円高の背景にも拘わらず、4.2万トンで前年（6万トン）をかなり下回った。

したがって輸入価格は、131円で前年（103円）を上回った。